

Vision

日本生理学会・教育委員会活動について

宮崎医科大学 生理

河 南 洋

平成7年度から始められたこの日生誌「巻頭言」においても数多くの先輩諸先生方が色々な視点から「生理学会の活性化」に向けての貴重な提言がなされてきました。改めて私がここで述べるべき提案を持ち合わせていませんが、この4月から教育委員会委員長に指名されましたので、この委員会において、今論議されていることを踏まえて今後の活動方針を述べてみたいと思います。金子会長が述べられました「生理学の復権を！」路線に少しでも貢献出来る活動を行いたいと思います。

今日、生理学教育を含め「医学教育改革」については多くの関心を集め、各大学・研究施設等で活発に論議・検討されております。本来「教育」には教えると同時に育成するという意味が含まれるわけですが、このうち特に後者に重点を置いて考えてみたいと思います。其の対称は「学部学生」「大学院生を含む後継者」と「中高校生を含む社会人」が挙げられます。いずれの対象者にしろ、生理学の面白さ・特徴は生きた状態で動きの変化をダイナミックに捉えること、そして生きている状態をリアルタイムで観察することにあることを強くアピールし、何より彼らの目を生理学、生理学会に向けさせるような環境整備・企画を整えることが必要であると考えます。生理学の真髄は構成要素分析・分類だけではなく、それら要素から構成され、包括的に統合されたシステムにおける動作原理の解明にあります。この立場の学問は基礎医学の中でも他に変わりうるものはなく、ま

してやコアカリキュラム導入に伴いややもすれば論理的思考訓練の場が少なくなっている現況ではその意義は益々増大すると思われます。教育委員会としてこの点を他分野の方々と協調して主張してゆくことが大切だと思います。

これまでの講義主体の知識や技術が一方的に伝達される方式はある一定教育レベルをおしなべて満足させるものではありませんが、未知の問題点を的確にしかも迅速に捉え対応してゆくには適しておりません。未知なるものに対応していくには自ら積極的に問題点を捉え、その解析を行い、適切な解決策を提案できるような課題探求能力が強く求められます。このような教育思想（指針）は最近の医療の公平性やその経済的効率化に資するところ大といわれておりますEBM（evidenced-based medicine）に基いた教育に十分適用出来ます。しかしなおまだ幾つか問題点や改良すべき点も指摘されておりますので、今後引き続き委員会としても実情調査を進めてゆくことが必要です。たとえば教育スタッフの充実や資質の見極めのための要件である個々のスタッフ能力評価の方法などは最重要検討課題です。単なる知識伝授だけのロボットに終わるのでなく、学生の好奇心・興味・自発性学習習慣を喚起するような方策を工夫し、適した環境整備が必要だと思います。専門分野以外の講義の際、多くの方が経験されているかと思いますが、今行っている講義自体に対する一抹の不安感があります。学生により魅力的な講義

のネタ（歴史的なエピソードなど）を収集し、共有してゆくことも活動方針の1つとしその実施に向け検討しているところです。具体的にはモデル講義、教材の共有化です。

また学部学生の意欲・主体性を最大限尊重し、支援してゆくことが重要であります。そこで生理学実習の充実と共に既に多くの大学（平成7年度時点で約半数）で導入されております基礎・研究室配属制度の更なる活用も有効だと思います。私自身、この制度が契機となり生理学を専攻することに至りましたので、強くその有効性を感じます。研究室配属で行われた研究成果発表の場を生理学会大会で提供し、優秀な発表に賞を授与する制度等が将来計画委員会から提案され、現在検討しております。

飛躍的研究の推進はそれぞれの領域に於ける強い個性と独自性、自由度が保障された環境下に集う若者の手にゆだねられていると思います。そのためにも現代の生理学を引き継ぎ、次代の生理学を担う研究者・教育者の育成が急務です。平成16年度からの臨床研修制度導入により、特に地方大学に於いては人材確保が益々困難となることが予想されます。幸い今回2009年IUPSの日本での開催が決定いたしました。このことは若手研究者にとり色々な面で活性化の契機になりうるのではないかと思います。より広く広報活動に努め、もう一度1965年東京で開催されたIUPS効果の再来を期待します。生理学会の活性化、日本からの情報発信や国際貢献、特に若手の強いモチベーションと連帯感の創出に寄与すると思います。学際化の必要性は、新しい文化が異なる文化と始めて対面した時に生まれるように、独創的新しい研究は発想や世界観が異なる分野の研究者との交流から自生的に芽生えてくることは自然の姿であります。そのため臨床医学をはじめ周辺分野との連携

を密にし、学際化を目指すべきだと思います。若手研究者主体の周辺分野とのジョイントシンポジウムの企画、また異なる分野同士の共同研究がスムーズに行われるような環境整備や若手研究者対象の賞の増設が望まれます。

高い山（学問体系・学会）を維持し続けるには、広く多様性、自由度と融通性を許容する広い裾野（人材）が必要です。若い人を生理学に引き付け、裾野を広げるという点では、高校生以下の低学年層や一般の人達を対象とした啓発活動にもっと積極的に参加すべきであると思います。平成13年度より我々地元、宮崎県が新規事業として「科学の杜、どっぷり合宿」を企画し、我々も参加協力致しました。理科離れが話題になっており、其の対策の一環として企画されたわけですが、参加した若者の生き生きした顔に接し、やはり生理学の持つこの面白さをもっと広く伝えるよう努力してゆく必要性を感じました。中学や高校の時に読んだり聞いたことがきっかけで生理学研究に入った方もおられると思います。

最後に、このような視点から、本年福岡で開催されます「第80回日本生理学会大会」において、教育委員会主催のシンポジウム「生理学に架ける橋」を企画致しました。其の趣旨は、もう一度生理学のidentityを確認し、特に若い学部学生・大学院生を励起することに尽きます。この趣旨に沿った講演を臨床医学を含め他分野の先生方からしていただく予定です。特に今後生理学教育・研究は独自の道を歩むのではなく、周辺領域と協力しながら、一方では真のサイエンスを追求し、また一方ではトランスレーショナルリサーチを見据えて、発展していくことが必要であると考えられるからです。是非多くの方の参加を切にお願いいたします。